

## 蘭溪道隆の法語

西尾賢隆

はじめに

さきに「蘭溪道隆の四六文」(『文藝論叢』六八號、若槻俊秀教授退休記念論集、二〇〇七年)と題して、蘭溪の常樂寺・建長寺語録から四六文を取り出し、「建長寺の鐘銘」(『禪學研究』八五號、二〇〇七年)と題して、鐘銘を中心に建寧寺じんにん語録、それに最明寺開堂小參を取り上げて讀んだ。

ここでは、どれも珍しいものではないが、蘭溪の法語、自贊の中から讀むことにする。

### 一 示左馬禪門

この左馬禪門に與えた法語は、辻善之助が『日本佛教史』第三卷(岩波書店、一九四九年)で全文を提示し、北條時宗に示した法語として以後、定説とされてきた。これに對し、村井章介氏は、『北條時宗と蒙古襲來』(日本放送出版協會、二〇〇一年)において、左馬禪門を足利義氏にあてるべきだとする<sup>(1)</sup>。私には、左馬禪門を誰とするかの用意はな

いが、これまで、何方もこの法語を讀んだ方はいないことから、何とか讀みたいものと考えた。以下に、四六文として分ち書きして示す。

道固非遠、

窮之在人。

惟患人之不能一往直前。所以

對面有千里之遙、

舉止被萬緣所隔、

苟或

信而不疑、

行之不倦、

時來緣熟、

道無有不通之理、

心無有不明之時。

道既通達、

心亦明白了、

居聲色之場、不被聲色所轉、

入是非之域、不逐是非所迷。

到此境界、

謂之大自在人、

（謂之出塵羅漢。

然後

隨世流布亦得、

不隨世流布亦得。

應物副機、

更無別法。

如上密用、本自信心中流出。

若談此事、

擬思量則差、

纔分別則遠。

不思量不分別、且此道

如何得入頭、

如何得明白。

須是自肯承當、

直下體取始得。

從上諸聖、皆自返求諸己、而至於不疑之地。且返己者何。於一切處十二時、一一從自己上、返覆推窮、如大覺世尊楞嚴會上爲阿難七處徵心相似。徵之至無可奈何處、待伊思量盡分別亡、識得真心所在了、世尊更與一喝。及至阿難瞿然避座處、方可與他腦後一錘、教他盡底掃除蕩然無礙。個是阿難見處、作麼生是公參學、當下分明之理。今既信心極深、此便是了斯大事底根本。又況叩宗師、窮楞嚴奧旨、每日誦大乘金剛般若經。此二經其中、已是爲人親切、分明說

破處亦多。

但能

披剝萬象、

析出精明、

晝窮夕思、

動想靜究、

忽然動靜二相、了然不生、

空無所空、

寂無所寂、

處、亦未爲究竟。金剛經云、若見諸相非相、卽見如來。目前

青山流水、

萬象森羅、

箇是諸相、如何是非相。

若識非相、

如來現前。

要得此一大事朗然去。伏望於

世事上放令輕減、

道念上著意返觀、

觀清淨本然、云何忽生山河大地。此

山河大地、本從何來、劫火洞然、又從何去。

但

如是體究、

如是而行、

行之既久、

體之亦深。

山河大地、不自外來、

日月星辰、弗從他出。

到此田地、一人發真歸源、灼然

十方虛空、

悉皆消殞。

恁麼則過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得、於不可得中、事事著得、便如禪宗道。

若人識得心、

大地無寸土、

是也。古德云、會得是障礙、不會不自在。

於此會得、

千差萬別、總歸一源。

楞嚴金剛、與禪無異。

苟

疑心不破、  
體察未明。

便見禪教有別。吾宗據實而論、

但得其本、莫愁其末、

但知作佛、莫愁佛不解語。

明得自心、  
無所不達。

且自心如何明得。昔日僧問雲門、不起一念、還有過也無。門云、須彌山。只這須彌山三字、看時雖無味、看久自分明。但以此力行力究、當於

接談交笑之處、

動靜語默之中、

或是非未決、

或方寸擾攘、

但舉此話頭、勿令忘却。仍舊一一收歸、在自身中、看

起念者是誰、

無念者又是誰。

如是返觀久久、般若圓成、有洞明時節。洞明後如何。

塵塵華藏海、

## 一處處普賢門。

## 左馬禪門に示す

道は固より遠きに非ず、之を窮むること人に在り。惟だ人の一往直前すること能わざるを思ふ。所以に對面に千里の遙かなる有り、舉止萬縁の隔つ所と被る。苟或し信じて疑わず、之を行いて倦まざれば、時來り縁熟して、道通ぜざるの理有ること無く、心明ならざるの時有ること無し。道既に通達して、心も亦た明白にし了れば、聲色の場に居り、聲色の轉ずる所を被らず、是非の域に入り、是非の迷う所を逐わず。此の境界に到る、之を大自在の人と謂い、之を出塵の羅漢と謂う。然る後世の流布に隨うも亦た得、世の流布に隨わざるも亦た得たり。物に應じ機に副うて、更に別法無し。如上の密用、本自より信心の中流出す。若し此の事を談じ、思量せんと擬すれば則ち差い、纔かに分別すれば則ち遠し。思量せず分別せず、且つ此の道如何が入頭するを得、如何が明白なるを得たり。須是らく自ら肯つて承當し、直下に體取して始めて得し。從上の諸聖、皆な自ら返つて諸を己に求めて、不疑の地に至る。且つ己に返るとは何ぞ。一切處十二時に於て、一一自己上從り、返覆推窮すること、大覺世尊楞嚴會上阿難の爲に七處に徵心するが如くに相似たり。之を徵して奈何ともす可き無き處に至つて、伊が思量盡き分別亡して真心の所在を識得し了るを待つて、世尊更に一喝を與う。阿難瞿然として座處を避るに至るに及んで、方めて他に腦後の一錐を與えて他をして底を盡くして掃除蕩然として無礙ならしむ可し。個れは是れ阿難の見處、作麼生か是れ公の參學、當下に分明の理あらん。今ま既に信心極めて深し、此れ便ち是れ斯の大事を了する底の根本なり。又た況んや宗師を叩き、楞嚴の奥旨を窮めて、毎日常乘金剛般若經を誦するをや。此の二經の其中、己に是れ人の爲に親切に、分明說破の處亦た多し。但だ能く萬象を披剝し、精明を析出して、晝窮め夕思ひ、動に想い靜に究めば、忽然として動靜の二相、了然として生ぜず、空も空とする所無く、寂も寂とする所無き處、亦た未だ究竟と爲さず。金剛經に云く、若し諸相は非相と見れば、即ち如來を見

る。目前の青山流水、萬象森羅、箇こは是れ諸相、如何なるか是れ非相。若し非相を識れば、如來現前す。此の一大事朗然にし去ることを要得ほつす。伏して望むらくは世事の上に於て、軽く減し放し令しめ、道念の上に意を著おき返觀し、清淨本然ならば、云何んぞ忽ち山河大地を生ずと觀よ。此の山河大地、本何れ従より來り、劫火洞然として、又た何れ従ゆて去くと。但し是もの如く體究し、是の如くにして行じ、之を行ずること既に久しく、之を體すること亦た深し。山河大地、外より來たらず、日月星辰、他より出づるに弗なず。此の田地に到つて、一人眞を發して源に歸すれば、灼然として十方虛空、悉く皆な消殞す。恁麼なるとき則ち過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得、不可得の中に於て、事事著得すれば、便ち禪宗に道うが如し。若し人心を識得すれば、大地寸土無しと、是れなり。古徳云く、會得すれば是れ障礙、會せざれば自在ならず、と。此に於て會得すれば、千差萬別、總べて一源に歸し、楞嚴・金剛、禪と異なること無し。苟もし疑心破れず、體察未だ明ならざれば、便ち禪教に別有ることを見ん。吾が宗實に據つて論ずれば、但だ其の本を得て、其の末を愁うること莫なかれ。但だ佛と作るを知つて、佛の語を解せざることを愁うる莫なかれ。自心を明得すれば、達せずといふ所無し。且つ自心如何が明め得ん。昔日僧雲門に問う、一念を起さず、還はた過よりや。門云く、須彌山。只ここの須彌山の三字、看る時味無しと雖も、看ること久しくして自から分明なり。但だ此の力めて行じ力めて究むるを以て、當に接談交笑の處、動靜語默の中、或いは是非未だ決せず、或いは方寸擾攘に於て、但だ此の話を擧して忘却せしむること勿るべし。舊に仍りて一一收歸して、自身の中に在おいて、念を起す者は是れ誰ぞ、無念の者は又た是れ誰ぞと看よ。是の如く返觀すること久久ならば、般若圓成にして、洞明の時節有らん。洞明の後如何。塵塵華藏海、處處普賢門。

以下、法語の典故を中心として見ていくことにする。

○道固非遠は、『孟子』離婁篇上に、「道は邇ちかきに在り、而も諸これを遠きに求む。事は易きに在り、而も諸を難きに求

む」とある。○無別法は、『景德錄』卷十一、仰山慧寂章に、「僧曰く、此の格を除くの外、還た別に方便有り、學人をして得入せしむるや。師曰く、別に有るも別に無きも、汝が心をして不安ならしむ」とある。○密用は、『寶鏡三昧』に、「潛行密用は、愚の如く魯の如し」とある。○信心は、『信心銘』に、「信心は不二にして、不二信心なり」とある。○思量は、『景德錄』卷十四、藥山惟儼章に、「師坐する次で、有る僧問う、兀兀地に什麼をか思量す。師曰く、箇の不思量底を思量す」とある。○分別は、『碧巖錄』四七則、本則評唱に、「是の法は思量分別の能く解する所に非ず」とある。○入頭は、『雲門廣錄』卷中に、「一日云く、夏に入ること來た十一日、還た入頭を得るや」とある。○不疑之地は、『五燈會元』卷十四、芙蓉道楷章に、「投子曰く、汝不疑の地に到るや。師即ち手を以て耳を掩う」とある。○返覆推窮は、『景德錄』卷五、司空本淨章に、「返觀して心を推窮するに、心も亦た假名なることを知る」とある。○阿難七處徵心は、釋尊が心のありかをめぐって、七つの問答を示して阿難の執著を目ざめさせたことをいう（荒木見悟『楞嚴經』〈佛教經典選14、筑摩書房、一九八六年〉四八・三六四頁）。○徵之至無可奈何處、……蕩然無礙は、『楞嚴經』卷一に、「阿難言う、如來、現今心の所在を徵す、而も我れ心を以て推窮し尋逐す。即ち能く推する者、我れ心と將爲う。佛言う、咄、阿難、此れ汝が心に非ず。阿難、巽然として座を避け、合掌起立して佛に白す、此れ我が心に非ず、當に何等と名づくべし。……」卷三に、「……爾の時阿難、及び諸もろの大衆、佛如來の微妙の開示を蒙り、身心蕩然として、罣礙無きを得たり」とある。○眞心は、『楞嚴經』卷一に、「佛言う、善いかな阿難、汝等當に知るべし、一切衆生、無始より來た、生死相續するに、皆な常住の眞心は、性淨明の體を知らず、諸もろの妄想を用うるに由るを」とあり、本性として清淨澄明な心をいう。○腦後一錐は、『景德錄』卷九、黃檗希運章に、「或いは草根下に一箇の漢有るに遇わば、便ち頂上より一錐して他を見る」とある。○大事は、『法華經』卷一、方便品に、「舍利弗よ、云何が諸佛世尊、唯だ一大事因縁を以て、故に世に出現すと名わば、諸佛世尊は、衆生をして佛知見を開かしめ、清淨を得せしめんと欲す、故に世に出現す、と」とあり、衆生に佛の知見を開かせるという一大事因

縁をさす。○披剝萬象、析出精明は、『楞嚴經』卷二に、「汝は微細に萬象を披剝し、精明淨妙の見元を析出すべし」とある。○動靜二相は、『楞嚴經』卷三に、「阿難よ、若し耳に因つて生ずとせば、動靜の二相、既に現前せざれば、根は知を成ぜず」とある。○金剛經云、若見諸相非相、即見如來は、『金剛經』五分にある。如來は相(卅二の特徴)がそなわつていないことを相(特徵)とすると見れば、如來を見たことになる。白居易は讀禪經(『白居易集』卷卅二)に、「須らく諸相は皆な非相と知るべし、若し無餘に住せば却つて有餘」と讀む。○清淨本然、云何忽生山河大地は、『楞嚴經』卷四による。○一人發眞歸源、灼然十方虛空、悉皆消殞は、『楞嚴經』卷九に、「汝等一人、眞を發いて元に歸せば、此の十方の空は、皆な悉く銷殞す」とあり、源と元は音通。○過去心不可得、現在心不可得、未來心不可得は、『金剛經』十八分に基づく。○大地無寸土は、『大慧錄』卷十に、「一箭紅心に中たれば、大地寸土も無し」とある。○會得是障礙、不會不自在は、不詳。『景德錄』卷卅、魏府華嚴長老示衆に、「若し會得せば、即今無礙自在の眞人、若也し未だ會せざれば、則ち是れ箇の檐枷帶鎖重罪の人」とあり、障礙は無障礙、もしくは無礙の間違いであろう。○疑心は、『臨濟錄』示衆に、「你が一念の疑は、即ち魔の心に入る」とある。○體察は、『景德錄』卷廿五、章義道欽章に、「何ぞ古人の方便を體察せざる」とある。○自心は、『碧巖錄』九七則、本則評唱に、「萬法は皆な自心より出づ」とある。○僧問雲門、不起一念、還有過也無。門云、須彌山は、『雲門廣錄』卷上にある。道元は『永平廣錄』卷一にこの公案を取り上げる。○一念は、『傳心法要』に、「一念も諸見を起さば、即ち外道に落つ」とある。○味は、『白居易集』卷廿三、道を味わうに、「齒を叩き晨に興きて秋院靜か、香を焚き宴坐して晚窓深し」とある。味道に通ずる。○華藏海は、『梵網經』卷上に、「盧舍那佛、……蓮花藏世界の海に住す」とあり、『景德錄』卷十、天龍章に、「各おのに華藏の性海有り、功德を具足す」とある。○普賢門は、『景德錄』卷廿六、瑞鹿本先章に、「天台教中、文殊・觀音・普賢の三門を説く、文殊門は一切の色、觀音門は一切の聲、普賢門は、歩を動かさずして到る、と」とあり、『臨濟錄』示衆に、「你が一念心の無差別光は、處處總て是れ眞の普賢なり」とある。

以上の出典を踏まえ、以下に現代語譯を試みることにする。

眞の道は元もと高遠な及び難いものでなく、道を窮めるのは人に在ります。ただあなたがまっしぐらに進めな  
いのを氣にします。故に面と向うと千里の遠さがあり、あなたの行いが多くの因縁により隔てらるることになり  
ます。もし信じて疑わず、道を窮めようと努められたならば、しかるべき時が到來し因縁が成熟して、道に通じ  
ない譯がなく、心も明白でない時はありません。道によく達したうえに心もはつきりしたならば、あらゆる感覺  
の對象の所にあつても、一切の對象に動かされることはなく、是非の範疇にあつても是非善惡の迷いを追い掛け  
ることはありません。このような段階に到りますと、その人を大自在の人と言い、出塵の羅漢と言います。かく  
して世に廣く行きわたった教法に従つてもよく、従わなくてもよろしい。あなたの機根に應じて佛が教化し、そ  
の上に特別の法はありません。右のような綿密な働きは、本來眞の心の働きから流出します。もしこの事を話し  
思量しようとすればくい違い、分別したとたんに遠ざかります。思量せず分別しないで、この道は、どうしたら  
一步踏み込むことができ、明白にすることができましょうか。自らよいとし己の事として、ずばりと丸ごとつか  
まねばなりません。そうであつてこそ始めてよろしい。これまでの多くの聖者たちは、自身をふり返つて道を己  
に求めて、大悟徹底の境地に至ります。自身をふり返るとはどういうことでしょうか。あらゆる所で四六時中、  
子細に自身を再三推し窮めること、例えば、釋尊が楞嚴會の時に阿難のために心のありかをめぐつて、七つの問  
答を示して執著を目覺めさせたようなものです。心を明らかにせんとしどうすることもできない情況になつて、  
彼の思量が盡き分別が無くなり、本來清淨な心のありかを見抜いた状態を待つて、釋尊がその上に一喝を與えら  
れました。阿難が驚いて坐處を引きさがらうとすると時に、頭のとっぺんに錘を打ち込んで、彼にとことんまで  
執着を跡形もなく解消させることが始めてできました。これは阿難の見解であつて、どうすればあなたの參禪學  
道が、その場で明らかになる道がありましょうか。現在あなたは言うまでもなく信心がこの上なく深いものがあ

り、まさしく道を窮めるといふ一大事因縁にカタをつける根源です。その上まして師家を訪ね、楞嚴經の奥旨を窮められ、毎日金剛經を讀誦されていて、なおさらです。この二經のそこには、甚だ人を導き教化するのにびたりと適合したものがあり、明らかに説き盡す處も多いものがあります。萬象の實體を剥き出し、精密明瞭な視覺の根元を摘出して、晝に窮め夜に思い、動に思い靜に窮めることができずれば、たちまち動か靜のいずれかの境が、明らかに生ぜず、空も空とするものがなく、寂も寂とするものがなく、一物もなく、靜寂そのものの状態も、まだ大悟した無上の境地ではありません。金剛經にいう、如來は相(卅二の特徴)がそなわっていないことを相(特徴)とすると見れば、如來を見たことになる、と。目前の青山流水、森羅萬象は、多様な相であつて、非相とはどういふものでしょうか。相がそなわっていないことがわかれば、如來が現前します。是非ともこの一大事因縁を明らかにするという結果をもたらしたいものです。どうか次のように望みます、今の世の出來事を輕減され、佛道に心を存して返顧し、本來清淨なものだとするならば、どうしてゆくりなくも山河大地等諸々の作りなされた現象を生みだすのか考察されたい。この山河大地は、本來どこから來て、壞劫の火災は焼き盡して、どこに行くのか、と。このように本質まで窮め、このように行い、行つた上に窮めることが深かつたならば、山河大地は外から來たものではないし、日月星も他から出て來たものではありません。この境地になつて、一人眞を發し源に歸すれば、十方の虚空はことごとく消え失せます。そのようなとき過去の心はとらえられないし、現在の心もとらえられないし、未來の心もとらえられない、とらえられない中で、諸現象を仕留められ、ば、それが禪宗でいう、人が心を見て取ると、大地に足をつける地面もない、というのがそれです。古徳もいつています、會得すれば自在に通達して礙げがなく、會得しないと自在でない、と。かくして會得すると、色々と甚しい違いも、みな一源に歸し、楞嚴・金剛の世界と、禪とは異なることはない。もし疑いの心が破れず、體得省察することがまだはつきりと見えなければ、禪と教とに違いをみることになります。わが宗は有りのまゝ、に言いますと、

ただその本を得さえすれば、その末を得ないのを悩むことなく、ただ佛と作るのを知りさえすればよく、佛の語を解しないことに悩まれませんように、わが心を悟り得ると、通達しないことはありません。いったい、わが心はどうすれば悟り得られましょうか。昔ある僧が雲門に問うた、一念たりとも諸々の分別心を起さなくとも、落度がありますか。雲門が答えていう、それは須彌山のように不動だ。この須彌山の三字こそは、よく見る時、味わいがなくとも、よく見ていると自然に明らかになります。専ら勤めて己事を究明し、話したり笑ったりしている時、體を動かし體を休め語り黙している時、あるいは是非がまだ決着せず、あるいは心が騒ぎ亂れている時でも、ひたすらこの公案を提起して、忘れさせないようにしなさい。今までのように一つ一つ問題を始末し自己の中に一念を起す者は誰か、さらに無念の者は誰かとよく見なさい。このように振り返ることが久しければ、般若の智慧が圓かに成就して、明らかに知れる時があります。明らかに知った後はどうかといいますが、一切の現象は佛の居られる世界のことであり、どこも差別のないありのままの心が普賢の世界であります。

蘭溪は、左馬禪門に眞の道を窮め、己の事として參禪學道することを勧め、佛道に心を存し、その本を得、作佛を知るようにと説き、禪門の信心がこの上なく深く、一大事因縁を悟る機縁が熟していると勵ましている。世事を輕減し、佛道に心を存するようにと説くことは、鎌倉幕府の要路者へのものといつてよく、北條時宗に比定したいが、十二歳―十四歳に當り、若年過ぎるという難點がある。ただ現在の目で見ると若年過ぎるが、當時の成熟年齢からすると、時宗に與えた法語と見てもよいのでは、と思つたりもする。

時宗の十二歳（弘長二年・一二六二）から十四歳（文永元年・六四）の間のこと、すると、蘭溪が建寧寺を退院して鎌倉に歸つてから時宗に與えた法語と受け取ることができないであろうか。『大覺錄』は、常樂錄・建長錄・建寧錄から構成されていて、建長での再住録は含まれない。

## 二 大覺錄の序・跋

「大覺錄」は、卷下の最後の所に、

敕差住持臨安府御前香火淨慈報恩光孝禪寺嗣祖比丘智愚校勘（93 a）。

とあり、虚堂智愚が校勘したことになっている。語録の序は、次のように述べる（46 a）。

蘭溪隆老は、蜀を出でて南遊す。蘇臺の雙塔に至つて、無明性禪師の室中に、東山の牛窓櫺五祖法演を過ぐるの話を擧

するに遇い、遂に省有り。是に於て松源崇嶽の破沙盆さを提げ傳うる所を得ることを知る。後十數年、海に航して日本

に之く。殆んど宿契あるが若く、迺ち大いに宗風を振う。其の門人禪忍、三會の語録を粹あめ、序を余に請う。余

其の略を觀るに曰く、寒巖幽谷、面面春を回らし、此土他邦、頭頭轍に合す、と。故に因つて序すと云う。時

に大宋景定三年二月望日、特に左右街都僧錄に轉じ、教門の公事を主管する、住持上天竺廣大靈感觀音教寺、兼

住持顯慈集慶教寺、天台の教觀を傳う、特賜紫金欄衣、特賜佛光法師法照。

蘭溪道隆氏は、蜀の地を出てから南遊することになる。姑蘇山上（蘇州）の雙塔寺に至ると、無明慧性禪師の室中で、五祖法演が東山にあつて水牛が窓の格子越しに通つていつた公案を提起するのに出合い（「無門關」卅八則）、かくて悟るところがあつた。そこで松源崇嶽がこわれた盆を提示し傳えるものがあるのを了解し無明を通して法を繼承した。十數年經過した後、海を渡り日本に行くことになった。それはまるで前世からの因縁のようで、かくして大いに宗風を盛んにすることになる。その門人の禪忍は、三會の語録を編集し、序文を私に求めた。私がざっと見た中に次のような隔對がある。表向きは巧みな作略を用いて、高い崖、奥深い谷にも、それぞれ春が再び巡つて來、密かに玄妙な働きを開示し、あちこちどこも道にびたりと合つてゐる、と。それゆえに序文を書くことにした。

蘭溪の門人禪忍は、三會（常樂・建長・建寧）の語録を集めて、序文を晦巖法照に求め、序ができたのは、景定三年二月十五日のことであつた。とすると、先に見た「蘭溪道隆の四六文」において、「大覺録」の年代設定を、玉村竹二説を承けて兀庵普寧が至つた上堂を基點として、建長録の上堂が建長六年（一二五四）からあり、辭衆上堂を弘長二年（一二六〇）のこととした。三會の語録とあるが、常樂・建長の二會録を晦巖に見せて序を書いてもらったのだらうと考えていた。それにしても建長録の弘長元年・二年の箇所は、晦巖に見せていないことになり、虚堂も建長録の途中までしか見なく、建寧録は全く校勘していないことになる。上堂の配列が整つているところから右のように考へてしまつた。

更に、次の虚堂の跋を讀むと、誤りを糊塗するわけには行かない（93 a）。

宋有名衲、

自號蘭溪。

一筇高出於岷峨、

萬里南詢於吳越。

陽山領旨、到頭不識無明、

擡脚千鈞、肯踐松源家法。

乘桴于海、大行日本國中、

淵默雷聲、三董半千雄席。

積之歲月、

遂成簡編。

忍禪久侍雪庭、

〔遠訪四明鏡梓。〕

言不及處、務要正脈流通、  
用無盡時、切忌望林止渴。

景定甲子春二月、虛堂智愚書于淨慈宗鏡堂。

宋に名衲有り、自ら蘭溪と號す。一筇高く岷峨より出で、萬里吳越に南詢す。陽山に旨を領し、到頭無明を識らず、脚を擡ぐるもたこと千鈞、肯えて松源の家法を踐む。桴に海に乗り、大いに日本の國中に行き、淵默雷聲、三たび半千の雄席もたを董す。之が歲月を積み、遂に簡編を成す。忍禪久しく雪庭に侍し、遠く四明を訪い梓に鏡まんとす。言及ばざる處、務めて正脈の流通を要し、用盡きる時無く、切に林を望み渴を止むることを忌む。

○筇、岷峨は、『文選』卷四、蜀都賦に、「夫れ蜀都は、……峨眉の重阻むかに抗う。……邛竹嶺むかに緣り、菌桂崖に臨む。……西に則ち右のかた岷山を挟んで、瀆ほりを湧よし川を發す」とある。○陽山は、尊相寺（平江府）のこと（『無明錄』）。○領旨は、『景德錄』卷八、打地章に、「忻州打地和尙。江西馬祖に旨を領してより、自ら其の名を晦くます」とあり、『祖堂集』卷六、洞山良价章に、「後、雲岳に參じ、盡く玄旨を領す」とある。○到頭は、『碧巖錄』卅四則、頌評唱に、「到頭霜夜の月、任運として前溪に落つ」とある。○不識は、『信心銘』に、「玄旨を識らざれば、徒らに念靜に勞す」とある。○無明は、『臨濟錄』示衆に、「你が一念心の歌得する處、喚んで菩提樹と作す。你が一念心の歌得すること能わざる處、喚んで無明樹と作す」とある。師匠の無明慧性をもさす。○擡脚は、『無門關』廿則に、「松源和尚云く、大力量の人、甚なに因りて脚を擡もたげ起たたざる。口を開くこと舌頭上に在らず」とある。○千鈞は、『景德錄』卷十二、西院思明章に、「問う、如何なるか是れ臨濟の一喝。師曰く、千鈞の弩、鼯鼠の爲に機を發せず」とある。○松源は、無明の師、松源崇嶽のこと。○家法は、『虛堂錄』卷八、「次の日の上堂。鴻山仰山に問う、子一夏上來せずの公案を擧す。師拈じて云く、鴻山の家法森嚴、只是ただ仰山不合に祖諱を道著す」とある。○乗桴なげ于海は、

『論語』公冶長篇に、「子曰く、道行われず、桴いかたに乗りて海に浮かばん」とある。○淵默雷聲は、『莊子』天運篇に、「子貢曰く、然らば則ち人に固より尸居して龍見し、淵默して雷聲し、發動すること天地の如き者有るか」とある。○忍禪は、『虛堂錄犁耕』に、「忠曰く、忍禪は蘭溪の徒、禪忍禪人なり」とある。○雪庭は、二祖慧可が達摩に雪庭で入門したときのことをさす。○正脈は、『碧巖錄』七三則、本則評唱に、「須是らく正脈裏に向て自ら見て、初めて穩當なるを得ん」とある。○望林止渴は、『世説新語』卷下、假譎篇(4)に、「魏の武行役して汲道を失い、三軍皆な渴す。乃ち令して曰く、前に大梅林有り、子を饒なまして甘酸、以て渴を解く可し。士卒之を聞きて、口皆な水を出だす。此れに乗じて前の源に及ぶことを得たり」とある。○淨慈は、『虛堂錄』卷三、淨慈錄に、「師景定五年正月十六日寺に入る」とある。○宗鏡堂は、『扶桑五山記』卷一、大宋國諸寺位次、第四淨慈寺に、「宗鏡堂法堂」とある。右の典據等によりながら日本語譯を以下に試みることにする。

宋に名のある禪僧がいて、自分から道號を蘭溪と稱している。彼は四川の筇つよをつき岷山・峨眉山のある地より拔きんでて、遠く吳越の地に法を求めて南詢した。蘇州尊相寺の無明慧性のもとで奥義を悟り、ひつきよう迷いを覺えず、向下門の働きを示し、足をあげて坐から起ちすぐれた力量を示し、進んで法の上の祖父にあたる松源崇嶽の家法を實踐した。桴つに乗って東の海に乗り出し、日本に是非とも行きたいものと思ひ、行くと深い沈黙のうちにも雷のように佛法を響かせ、常樂・建長・建仁と三たび多くの修行者のいる大禪寺の住持となった。その寺々での説法が積もつて、書物となった。門人の禪忍上人が永く蘭溪に師事し、その書物を持って遠く中國の窓口である明州の私を訪れ板木に刻もうとした。<sup>(5)</sup>言葉の及び難い處も、できるだけ佛祖の正傳の流通を願ひ、働きの盡きることなく、梅林を遠く見てのどの渴きをがまんするようなことを是非とも避けねばならなく、この大覺錄の上梓を言祝ぐ。景定五年(一二六四)二月、虛堂智愚が淨慈寺の宗鏡堂に記す。

左右、句作りの整わない對句もある四六文とはいへ、虛堂が跋文を書いたのは景定五年のことであり、臨安の淨慈

寺に住持したてのことであった。校勘の依頼は、晦巖法照が序文を頼まれた景定三年とみてよいであろう。蘭溪は三たび五百おひゃくの修行者からなる大寺に住山し、そこでの雷鳴のような説法を編集した三會の語録を忍禪が虚堂のもとに持参して校勘と跋文を請うたのに對し、跋の方はわざわざ四六文でもって書いたことになる。この跋の書かれた年月からしても、建長・建寧における上堂の年月設定には無理がある。覺慧・圓範が建長録を編集した際に、兀庵普寧がடுத்த上堂を混入したものと考えざるを得ない。

右のように考えると、建長録の上堂は、建長三年（一二五二）の途中から正元元年（一二五九）辭衆上堂まで入っていることになり、建寧録は正元元年から弘長元年（一二六一）ものとなる。<sup>(6)</sup>三會録を見た上で、晦巖も序文を書くことができたことになる。前掲の「建長寺の鐘銘」中（一二三三頁）に、最明寺の開堂を弘長元年（一二六一）夏安居の後としたが、正嘉二年（一二五八）と訂正せざるを得ない。<sup>(7)</sup>

### 三 頂 相 贊

蘭溪が朗然居士の求めに應じて頂相に自ら贊を加えている。<sup>(8)</sup>贊そのものは、色々な圖録等に載録されているものの駢賦として検討したものではない。<sup>(9)</sup>そこで、分ち書きして次に示す。

拙而無比、與它佛祖結深冤。

老不知羞、要爲人天開正眼。

是非海中闊步、鞞百千遭、

劍戟林裏橫身、好一片膽。

引得朗然居士於雲拳上、能定乾坤、

負累蘭溪老人向巨福山、倒乘舴艋。

相同運出自家珍、

一一且非從外產。

辛未季春、住持建長禪寺

宋蘭溪道隆奉爲

朗然居士、書于觀瀾閣。

拙にして比なび無く、它的佛祖と深冤を結び、老いて羞を知らず、人天の爲に正眼を開かんと要ほす。是非の海中闊歩し、鞞すむこと百千遭、劍戟の林裏 身を横え、好きこと一片の膽。朗然居士を雲拳上に引得し、能く乾坤を定め、蘭溪老人を巨福山に負累し、倒さかしまに舴艋に乗る。相同に自らの家珍を運出し、一一且つ外より産するに非ず。辛未の季春、建長禪寺に住持する宋の蘭溪道隆、朗然居士の爲にし奉り、觀瀾閣に書す。

○拙は、『龐居士語錄』に、「峰笑つて曰く、是れ我れの拙なりしか、是れ公の巧みなりしか」とある。○無比は、『碧巖錄』十五則、頌評唱に、「博學にして文才傑俊、朝中に比なび無く、當世之が爲に獨歩す」とある。○結深冤は、『無門關』黃龍三關に、「怪しむこと莫かれ、無門關の險、衲子の深冤を結盡す」とある。○正眼は、『碧巖錄』普照序に、「其れ惟だ雪竇禪師は、超宗越格の正眼を具して……」とある。○是非海中は、『無門關』十五則に、「一夜是非海裏に在つて著到し、直に天明を待つて再來せば、又た他の與なに注破す」とあり、大疑をいう。○横身は、『景德錄』卷廿、延慶奉璘章に、「師曰く、身を横たえて海に臥し、日裏に燈を挑かぐ」とある。○引得は、『碧巖錄』四〇則、本則下語に、「黃鶯を引き得て、柳條より下らしむ」とある。○定乾坤は、『景德錄』卷廿六、鎮境志澄章に、「是かの如く是れ乾坤を定むる底の劍」とある。○負累は、「偷劫行われざれば、相負累すること無し。亦た世間に於て、宿債を還さず」とある。○向は、對からすると、文語の於に當る。○運出自家珍は、『碧巖錄』六四則、本則評唱に、

「須是らく自己の家珍を運出して、方めて他の全機大用を見るべし」とある。○産は、『碧巖錄』九〇則、本則評唱に、「中秋の月出づるに到るや、蚌はつは水面に浮かび、口を開いて月光を含み、感じて珠を産む」とある。

私はへまであつて他に並ぶものもないくらいだが、他の佛や祖師方と共に修行者たちの激しい恨みを引き起し天下に清らかな禪風を巻き起こそうとし、老いて恥を知ることもなく、人間界や神々の爲に佛法の眼目を開かせようと思う。あなたは是非の深淵に自由に行動し、滑かに進むことが千回近くにもなり、劍や戟の中に身を横へても、みごとな一片の心だ。朗然居士を兩拳に引きつけ、天地をびたりと決めさせ、蘭溪老人を建長寺に引き受けさせ、小舟にさかさ乗りする。お互いに己れに本来具っている持ち前を發揮し、しかも、一つ一つ外から生まれてくるものではない。文永八年（一二七二）三月、建長寺に住持する宋出身の蘭溪道隆が朗然居士のおん爲に觀瀾閣において記す。

この頂相の贊は、自己のことを述べるよりも、朗然を讚え善導しようとするものである。居士は、從來、推測されていることではあるものの、私も贊の内容からすると、北條時宗と考えてよいと思う。<sup>(10)</sup> そう考えると朗然の肖像畫ではなくて、なぜ蘭溪の頂相なのか、説明する必要があるが、今の私には説明できない。

### おわりに

左馬禪門に與えた法語は、散文と四六文から構成されていて、信心がこの上なく深いものがあり、『楞嚴經』の奥旨を窮め、『金剛經』を讀誦する禪門を、阿難への七處徵心の例えや、雲門の須彌山の公案等々を用い、一大事因縁にカタをつけ、道を窮めさせようとしている。この禪門を時宗とすると、若すぎるという点があるが、將來の得宗としての訓育を受けつ、あつた時宗に、蘭溪の法語を消化し自己のものとする機縁が熟しつ、あつたとみてもよいの

ではと推察する。

ところが、そうなると、この法語がなぜ『大覺錄』に入っているのか、説明がつかなくなる。村井氏の説く足利義氏を左馬禪門とすると、常樂もしくは建長住持期間となり、『大覺錄』に入っていることの説明はつく。今は、時宗に與えたものか、義氏に與えた法語なのか、決着をつけるだけの材料の持ち合わせがない。

語録の序跋を検討することにより、さきにもた「蘭溪道隆の四六文」の建長寺での上堂を、建長三年の途中から正元元年の辭衆上堂までが、残っていることになり、建寧での説法は、正元元年から弘長元年に行われたと訂正せざるを得なくなった。また、最明寺の開堂を正嘉二年のこと、訂正する。なお、蘭溪が建長寺の住持として意識したのは建長元年のことであった。時頼が建立を發願した段階で、蘭溪に住持の辭令が發令されたのであろう。

頂相の贊は、朗然居士を導こうとするものになっていて、居士を通説のように、私も時宗に當てるのがよい、と考えるに到った。

蘭溪は、これまで、自らの遊山の意で渡來したところから（常忍御房への尺牘）無學祖元と比べて低く見られる傾きがあった。しかし、『大覺錄』の四六文を見てみると、典據を踏まえて禪を説くその教えは、決して低いものではない、と思うに到った。そういう點からすると、禪宗史の通説を點檢する作業が必要になってくる。今後の課題としたい。

注

(1) 川添昭二氏の『北條時宗』（人物叢書、吉川弘文館、二〇〇一年、八九頁）は、村井説による。

(2) 示禪忍上人（『大覺錄』卷下、84c）法語は、四六文により作製されている。

了無趣向處、本自圓成。  
纔涉思惟時、愈見遼遠。

直饒

言前構得、  
句下知歸。

震旦望扶桑、  
猶隔滄溟在。

若是個具徹法慧眼離念明智底、說甚言前句下。

終不墮千聖關振子中、  
直要出諸祖一頭地外。

橫拈倒用、逆行順行、

妙轉臨機、豈假他力。

所以巖頭久隨德山、而不肯德山。是知

智過於師、

方堪傳授。

老拙自主巨福以來、莽十三載、

荷兄道聚、

亦已年深。

每愛其朴實無偽。

屢於談話間引喻相擊、

兄但微笑而不能盡領。

一日炷香出紙云、某欲渡宋

瞻觀名山、

參拜知識。

乞一語而爲往來受用。遂告之曰、

吾語非渠受用之物、

若要受用無盡之時、

此去博多解纜後、纔到四明、徑往天台山。國清寺內  
有個老豐干、現在彼中、踞虎頭收虎尾。可趨前作禮

剖露。其詳必爲汝饒舌。然後却持歸來、爲無盡受用。  
彼若問拙者事時、低聲問道、

夜行徒衣錦、

年老覺心孤。

更問如何若何、切不得漏泄。

了に趣向の處無く、本自より圓成し、纔かに思惟に涉  
る時、愈いよ遼邈を見る。直饒い言前に構得し、句下に  
歸を知るも、震旦より扶桑を望み、猶お滄溟を隔つる在  
り。若是し個の徹法の慧眼・離念の明智を具する底は、  
甚の言前句下と説かん。終に千聖の關振子の中に墜せず、  
直に諸祖を一頭地の外に出でんことを要す。横拈倒用、  
逆行順行、妙轉臨機、豈に他力を假らんや。所以に巖頭  
久しく德山に隨つて、德山を肯わす。是に知る、智の  
師に遇りて、方めて傳授するに堪たることを。老拙巨  
福を主つてより以來た、莽すること十三載、兄の道聚を  
荷うこと、亦た已に年深し。毎に其の朴實にして偽り無  
きことを愛す。屢しば談話の間に於て喻を引きて相擊つ  
に、兄但だ微笑して盡く領すること能わず。一日香を  
炷き紙を出して云く、某宋に渡り名山を瞻觀して知識  
を參拜せんと欲す。一語を乞うて往來の受用と爲さんと。  
遂に之に告げて曰く、吾が語は渠が受用の物に非ず、若  
し受用無盡の時を要せば、此を博多に去き纜を解きて後、  
纔かに四明に到らば、徑ちに天台山に往け。國清寺内に  
個の老豐干有り、現に彼中に在り、虎頭に踞し虎尾を收

む。趨前作禮して刮露す可し。其れ詳かに必ず汝が爲に饒舌せん。然る後却に持して歸り來り、無盡の受用と爲せ。彼若し拙者の事を問うの時、低聲に向道え、夜行徒に錦を衣、年老いて心孤なることを覺う、と。更に如何ん若何んと問うも、切に漏泄することを得ざれ。

この禪忍に與えた法語を讀むと、蘭溪が建長寺に住持となつてから十三年経過したことになり、「期すること十三載」とあるものの、數えで解釋しないと、序文と齟齬をきたす。それでも、北條時頼が建長寺建立を發願した建長元年（一二四九）には、蘭溪は住持として處遇されたと考えざるを得ない。建長での住持は、建長元年から正元元年（一二五九）までとなる。三年十一月八日の事始め以前から上堂が行われていて、いつ入院の上堂が説かれたかも判然としない。

- (3) 晦巖法照については、大松博典「晦巖法照の研究」〔駒澤大學大学院佛敎學研究會年報〕十三號、一九七九年〕があり、大塚紀弘「鎌倉前期の入宋僧と南宋敎院」〔日本歴史〕七〇二號、二〇〇六年〕にふれる。

- (4) これは、無著道忠「虚堂錄掣耕」日本建長寺隆禪師語錄跋の注を見ていて知った。

- (5) 鄞縣の金文山惠照寺、もしくは、明覺塔に虚堂がいた時のことであろう（拙稿「無爾可宣」筆墨蹟）「中世の日中交流と禪宗」所收、吉川弘文館、一九九九年。南宋での「蘭溪錄」の開版については、佐藤秀孝「虚堂智

愚と蘭溪道隆——とくに直翁智侃と「蘭溪和尚語錄」の校訂をめぐる——」〔禪文化研究所紀要〕廿四號、一九九八年〕という論稿がある。

- (6) 建長寺における上堂の年を以下のように訂正する〔蘭溪道隆の四六文〕。

- 8 (50 c) 建長六年→建長三年  
 26 (52 a) 建長七年→建長四年  
 44 (53 a) 康元元年→建長五年  
 62 (54 a) 正嘉元年→建長六年  
 102 (56 c) 正嘉二年→建長七年  
 104 (56 c) 正嘉二年→建長七年  
 147 (59 b) 正元元年→康元元年  
 169 (60 c、61 a) 文應元年→正嘉元年  
 207 (63 b) 弘長二年→正元元年  
 188 (62 a) 文應元年→正嘉二年
- (7) 建寧寺における上堂の年を以下のように訂正する（建長寺の鐘銘）。
- 9 (63 c) 弘長二年→正元元年  
 12 (64 a、b) 弘長二年→正元元年  
 23 (65 a) 弘長二年→正元元年  
 25 (65 a) 弘長二年→正元元年  
 50 (66 c) 弘長三年→文應元年  
 62 (67 b) 弘長四年→弘長元年
- (8) 頂相について、最近のものに、海老根聰郎「頂相管窺

——成立をめぐる」(長岡龍作編『講座日本美術史』  
4、東京大學出版會、二〇〇五年)、井手誠之輔「頂相  
における像主の表象——見心來復像の場合——」(『佛教  
藝術』二八二號、二〇〇五年)等がある。

(9) 有名な向嶽寺藏、蘭溪贊、達磨圖も朗然居士の求めに  
應じたものである。駢賦として分ち書きをする。

香至國王之季子、

般若多羅之克家。

(遊竺乾、破六宗之執見、

來震旦、開五葉之奇花。

香傳日域、

瑞應河沙。

少林元不墜靈芽、

移向侯門發異葩。

建長蘭溪道隆爲

朗然居士拜贊

香至國王の季子、般若多羅の家を克くす。竺乾に遊び、  
六宗の執見を破り、震旦に來たり、五葉の奇花を開く。  
香日域に傳わり、瑞河沙に應ず。少林元より靈芽を墜  
わず、侯門に移り異葩を發く(向は平仄の上から於の代  
りに用いる)。

鳥尾新氏の釋文・語註・現代語譯・解説がある(入矢  
義高・島田修二郎監修『禪林畫贊——中世水墨畫を讀  
む』毎日新聞社、一九八七年)。

(10) 田中一松「建長寺大覺禪師畫像考」(『日本繪畫史  
論集』中央公論美術出版社、一九六六年)參看。なお、  
蘭溪の自贊は、村井章介「對外關係を語る肖像畫贊の收  
集」(村井編『八一—七世紀の東アジア地域における人・  
物・情報の交流——海域と港市の形成、民族・地域間の  
相互認識を中心に——』(上) 東京大學大學院人文社會  
系研究科、二〇〇四年) 12に載録する。

(11) 田山方南『續禪林墨蹟』103(思文閣出版)。常忍御房  
とは、若訥宏辯のこと。若訥は、博多圓覺寺にあった蘭  
溪に入門している(川添昭二「博多圓覺寺の開創・展開  
——對外關係と地域文化の形成——」『市史研究 ぷくお  
か』創刊號、二〇〇六年)。